
在朝鮮日本人画家における美術の「中心と周縁」 ——山田新一(1899-1991)の活動を中心に——

申叟正(東京大学)

本発表は、在朝鮮日本人画家である山田新一の朝鮮における活動内容を具体的に跡付けることで、彼の朝鮮画壇に対する認識を多角的に考察するものである。

山田新一(以下、山田と略記する)は、1899年台湾の台北市に生まれると、1918年から23年まで東京美術学校で長原孝太郎、小林万吾等に学んだ後、1923年に朝鮮に渡り、終戦を迎える1945年まで京城で活動した在朝鮮日本人画家である。京城では、京城第二高等普通学校で図画教師を務めながら、朝鮮美術展覧会と帝国美術展覧会にほぼ毎年出品を果たしている。1928年からは2年間パリに遊学もし、朝鮮画壇において中心的な役割を果たした洋画家である。

しかし、山田のこのような経歴を網羅的に捉えた先行研究は未だ存在していない。韓国では2000年代以降、戦前に朝鮮で活動した日本人画家に関する研究が盛んに行われてきたが、山田の存在は、数多くの在朝鮮日本人画家の一人として短く触れられているに過ぎない。あるいは、山田が戦後に行った戦争記録画の収集活動に注目し、彼の画業全体をそれに基づいて評価するような研究がなされている。

韓国だけでなく日本の美術史研究においても、山田は周縁的な存在と考えられる。中学校時代を過ごした宮崎の郷土画家として地元の美術館で個展が開かれ、関連記事が書かれることがあっても、日本近代美術史の中で、山田の活動の意味について論じられることはなかった。

山田の活動内容を日韓の近代美術史上に位置づけるためには、東京と京城、パリ、そして戦後に暮らした京都に至るまで、その足跡と各々の場所での制作を有機的に把握する必要がある。それらを総体として見ることで、激動の時代を生きた画家の画業全体だけでなく、日韓近代美術史における山田の栄辱をも理解することができる。特に、京城からパリへの移動は、近代洋画の形成期において、東アジアと西洋の間に存在した美術のヒエラルキーの問題を考える手掛りともなり得る。在朝鮮日本人画家の活動を詳細に記した資料は多くない中、アーカイブが存在するほぼ唯一の画家としても、山田は研究対象として十分な価値を持つ。

本発表ではまず、都城市立美術館に収蔵されている山田のアーカイブを綿密に調査した成果を基に、朝鮮滞在期における活動内容を紹介する。朝鮮美術展覧会への出品に加え、その著述活動にも注意を向けることによって、当時の朝鮮社会や美術界に対する山田の認識を明らかにする。同時代の日本とパリの画壇の状況や、戦後における山田の活動も同時に検討しながら、彼の活動が持つ歴史的な意義や、彼が経験し且つ認識していた美術における「中心と周縁」の意味を考察する。山田の事例を通じて、在朝鮮日本人画家の活動と彼らの朝鮮認識を理解する基盤を築き上げたい。戦前と戦後、内地と外地、国家と個人という複雑な状況に置かれた彼らの立ち位置を理解した上で、正当な評価の可能性を提示することが本発表の目的である。